ルはそれぞれに違っています。

皆で目標を共有しないまま多職種連携を進めても、成果は得られないはずです。保健も医療も福祉も「満足できるその人らしい人生をいかに実現するか」といった同じゴールを、みんなで共有することで、連携を求めなくても「統合」は進むと私は考えています。

今こそ「元気高齢者」の育成支援にシフトする時期

超々高齢化、人口減少の進むこれからの日本にとって最大の社会資源とは何でしょうか。それは若者でも移民でもなく、これから増える高齢者ではないでしょうか。

しかし現状の医療制度は手厚く、年を重ねて病気をしたら、すぐに要支援・要介護者に認定され、症状が進めば介護度を上げてもらえます。その結果、医療依存が常態化していき、やがてべったり医療・べったり介護を余儀なくされることになってしまいます。「その人らしい生き方をどう支援していくか」ということが地域包括ケアのテーマでありながら、この状況では高齢者の自立に期待することもできない状況です。

まずは元気な高齢者の一人ひとりの経験やスキル、存在を「社会のために活かしていこう」と考えることから始めていくのはどうでしょうか。今後は、社会的弱者へのケアだけを行うのではなく、社会的弱者をつくらないようにするというポジティブシンキングがますます重要となってきます。

キーワードは「入院前から退院支援」

入院して病気は治ったけれど、その間に認知症を発症したり、寝たきりになってしまったということは絶対に回避しなければなりません。

入院をすることになっても、それまでの生活と分断することなく、機能をちゃんと維持し、速やかな退院につなげること。そして介護も含めた「かかりつけネットワーク」で以前通りの生活を行うためのフォローアップを行うこと。それが「ときどき医療・ときどき介護」のひとつの姿だと考えます。

医療も介護も生活の中の資源の一つ。入院はもとの生活に戻すためなど、みんなで目指す方向性や医療の考え方を大きく見直すチャンスでもあります。その人らしい生き方の支援があったり、生活を支える医療とつながることが、医療費の適正化にもつながっていくと考えます。

元気高齢者とは「生きがい」や「居場所」を持っている人

「元気高齢者」とは「ときどき医療ときどき介護」を受けながらも、自分らしく意欲的に生き、地域や隣人のために貢献しようとする人です。高齢者をケアの対象とするのではなく、日本を支える中心資源として、生きがいを持って働ける場所を構築していく、そこに日本の将来があると考えます。

また、高齢者自身も若い人を支えるという自らの役割を再認識しなければなりません。そして、元気高齢者の育成支援をするために、医療や介護だけでなく、地域もどう取り組んでいくか、それぞれ立場が違う人も一緒になって考えていかなければなりません。

これからは元気高齢者の育成支援が活発になり、歳を重ねても働く場所と生きがいを得ることができ、長生きして良かったと思えるような地域づくりが、地域全体を元気にしていくのではないでしょうか。高齢化率に一喜一憂することなく、元気高齢化率が高いことを喜びにできるまちづくりを進めていただきたいと思います。